

ID No.	3081
研究課題名	ヘルペスウイルスの潜伏感染が認知症進行に与える影響の分子基盤解明
研究代表者	北爪 しのぶ (福島県立医科大学・教授)
研究組織	
受入教員	川口 寧 (東京大学医科学研究所・教授)
研究分担者	高橋 一人 (福島県立医科大学・講師)
	三浦 里織 (福島県立医科大学・助教)
	長井 健一郎 (福島県立医科大学・病院助手)
	武藤 優衣 (東京大学医科学研究所・技術補佐員)
研究報告書	
本研究では、HSV の潜伏感染は AD 発症を早める重要な因子の 1 つになり得るとの仮説のもとに、次世代型 AD モデルマウス、単純 HSV 持続および再活性化モデルなどの最新の病態モデル動物を組み合わせ、解析を行い、仮説の実証を試みると共に、機構の背景にある分子基盤を明らかにすることを目的とする。 2021年度: <i>App^{NL-G-F/NL-G-F}</i>は、次世代型ADモデルの中で最も早期にAβが脳内に蓄積するマウスである。<i>App^{NL-G-F/NL-G-F}</i>を3群に分け、A群はコントロール（未処理）のADモデルマウス、B群とC群のADモデルマウスは6週齢のときにHSVを角膜感染させ、潜伏感染モデルとした。C 群に関しては、9週齢時にcyclosporin A(10mg/kg)を腹腔内に隔日で14日間投与し、12週齢時に脳を摘出し、免疫組織学的解析を進めているところである。この実験の前提として作出していたAD増悪モデルの解析を終え、論文化することが出来た (Y. Tachida <i>et al. J. Biol. Chem. in press.</i>)	